

The 97th Annual Meeting of the Japanese Society of Pathology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/17303

『学会見聞記』

第97回日本病理学会総会 The 97th Annual Meeting of the Japanese Society of Pathology

江 前 水 緒
金沢大学医薬保健研究域医学系
形態機能病理学講座
博士課程2年

私はこの度、第97回日本病理学会総会に主催者として参加しました。金沢市での開催は昭和11年に旧金沢医科大学病理学の中村八太郎教授が第12回病理学会総会を開催されて以来、実に71年ぶりとのことで、大変貴重な経験をさせていただきました。開催期間は今年の5月15日から17日までの3日間でしたが、私が入局した1年前には既に準備が進められており、総会が近づくにつれ、教室全体で慌しさの中に期待や緊張感が高まっていくのを肌と感じました。私は一般公演が主の小さな会場の担当でしたが、主催者のネームタグを受け取り、教室の一員として是非この総会を成功させたいと思いました。

開催場所は石川県立音楽堂とホテル日航金沢で、少し離れていたのですが、天候に恵まれ、初夏の金沢の風を受けながら歩いて会場を回れる気持ちの良い学会でした。3題の宿題報告をはじめ、特別講演2題、教育公演2題、シンポジウム4題、ワークショップ19題、一般公演1049題の発表があり、いずれも最近のトピックスで興味深いものでした。今回は主催者側であり、その全てに参加することはできませんでしたが、いくつかの講演を拝聴することができとても勉強になりました。

宿題報告では福岡大学医学部病理学講座の岩崎宏教授による、軟部腫瘍の病態についての講演に感銘を受けました。日常の病理診断において、診断が難しく悩まされる軟部腫瘍について、組織学的パターンと免疫染色を用いたアルゴリズムで分かりやすく説明され、目前の霧が晴れる思いでした。しかし一方でアルゴリズムに頼りすぎた機械的な診断が孕む危険性についても考えさせられました。先生の研究室では軟部腫瘍の染色体・遺伝子分析についても詳しく検索されており、これらの技術を総合して複雑な軟部腫瘍の診断がなされるのだと感じ入りました。また先生は軟部肉腫の発生母地の検討に力を注いでおられ、悪性線維性組織球腫(MFH)細胞の細胞膜に発現するFU3抗原が正常組織では血管周囲の間葉系細胞で陽性であることより、MFHが血管周囲間葉系細胞を起源とする可能性を挙げられました。また骨髄抑制したマウスにGFP発現グリーンマウスの骨髄細胞を移植し、MFH類似腫瘍を発生させたところ、腫瘍細胞にGFP陽性細胞が認められたことより、骨髄由来間葉系幹細胞ないし前駆細胞が腫瘍化する経路も考えられるとのことでした。骨髄由来の幹細胞を起源とするcarcinogenesisについては各分野で議論されている話題であり、とても興味深いお話でした。

教育講演では当教室の中沼教授による、IgG4関連硬化性疾患についての講演を聞かせていただきました。IgG4関連硬化性疾患とはこの数年で確立されてきた疾患群であり、かつては個々の疾患として認識されていた自己免疫性膵炎、硬化性胆管炎、特発性後腹膜線維症や炎症性腹部大動脈瘤などが実はIgG4陽性形質細胞の浸潤と線維増生という類似した病態によって惹き起こされることがとても興味深く思われました。さらに慢性硬化性唾液腺炎、肺の炎症性偽腫瘍や間質性肺炎、間質性腎炎、前立腺炎など多くの病変で次々とIgG4の関連が明らかにされてい

くことに感銘し、ひとつの臓器や病変にとらわれず広い視野を持って思考することの大切さを知りました。IgG4関連硬化性疾患はステロイドに対する反応性が高いとのことであり、この病態が明らかにされたことが多くの患者さんの助けになったであろうと思われ、改めて基礎医学研究の重要性を考えさせられました。

ワークショップでは、日頃病理診断で迷われ、また病理医によって意見の分かれることの多い大腸鋸歯状病変について、最近の研究を検討するものがとても参考になりました。しかしこの病変についてはまだまだコンセンサスが得られておらず、今回のように繰り返し議論を重ねていくことが重要だと思われました。このワークショップには病理医の他、消化器内科の先生による内視鏡所見の解説を聞かせていただくことができ、とても勉強になりました。臨床から離れすぎず、連携を保っていくことを忘れていたと思いました。また皮膚の軟部腫瘍についてのコンパニオンミーティングでは遭遇機会が少ない上に診断が困難な皮膚軟部腫瘍の診断をとて分かりやすくクリアカットに説明していただきました。このコンパニオンミーティングは遅い時間だったにもかかわらずとても人気があり、皮膚軟部腫瘍についての関心の高さを感じるとともに、参加できて本当に良かったと思いました。

病理学会総会に参加するのはこれが初めてではありませんが、今回は主催者側であり、私にとっても思い入れのある学会となりました。内容の充実した素晴らしい学会であり、微力ながら主催者として末席に加わることができたことを嬉しく思います。また今回の学会期間には、中沼教授と交流のある多くの海外の先生方が金沢に來られ、貴重な講演を聞かせていただきました。私の拙い英語の質問に耳を傾け、丁寧に答えてくださった先生に感謝し、今後も研究に、診断に努力していこうと思いました。

